２０世紀の始まり（1901～1915)、その７

≪多摩川流域から、電気関係企業が育った≫

２０世紀初頭は、電気・通信分野の革新時代でした。エジソンの発明やマルコーニの無線電信など技術革新が相継ぎ、日本は技術導入や国産化を行う新しい企業が登場します。

今では国際企業となった著名な会社も、多摩川流域に工場を建設して発展していきました。その代表例を紹介します。

１９０８年（明治４１）、「東京電気」が川崎工場を建設します。「東京電気」は、日本のエジソンといわれた藤岡市助（注１）が、国産電球を製造するため設立した「白熱舎」が改称した会社です。

当時、工部省発注の電信機を製作した「田中製作所」をルーツとする「芝浦製作所」（注２）、また「沖電気」（当時は「明工舎」（注３））や、「ＮＥＣ」（注４）も存在しました。

なお、川崎に縁の深い「富士通」（当時は「富士電機製造株式会社」、注４）は、やや遅れて１９２３年（大正１２）の設立です。多摩川沿川に多くの事業所を持つ「キヤノン」（「精機光学研究所」、注５）は、さらに遅れて１９３３年（昭和８）創業です。

こうしたエレクトリック産業が、欧米とほぼ同時期に成長し、そして、関東大震災以降、、次々と多摩川流域に工場を建設していきます。さながら、シリコン・バレーならぬエレクトリック・リバーとなっていくのです。

それは、後ほど紹介する多摩川直轄改修や南武線敷設によるところが多かったと考えます。また、電気・通信分野での軍需が旺盛だったことも、エレクトリック産業が育った背景にあります。

注１：藤岡市助（生没年：1857－1918 年）は、工部大学校を卒業。１８８６年（明治１９）には日本初の電力会社である東京電燈を創設しています。その後、エレベーター、路面電車などを開発するとともに、白熱電球を生産するため、１８９０年（明治２３）に白熱舎を創設。なお、川崎市の東芝小向工場は、１９３５年（昭和１２）に建設されたもの。

注２：「田中製作所」は、、幕末「からくり儀右衛門」と称された田中重久（生没年：1799－1881 年）が、１８７５年（明治８）、銀座において創業。２代目が、芝浦に移転し、「芝浦製作所」と改称。「東京電気」と「芝浦製作所」は、１９３９年（昭和１４）合併し、現在の「東芝」が誕生しました。

注３：「明工舎（沖電気）」は、沖牙太郎（きばたろう、生没年：1848－1906 年）が、１８８１年（明治１４）に創業した会社。同年、国産第１号の電話機を製作しています。

注４：「日本電気株式会社（ＮＥＣ）」は、岩垂邦彦（生没年：1857－1941）が、１８９９年（明治３２）に、「ウェスタン・エレクトリック社（米国）」と合弁で設立した会社。なお、川崎市の玉川向工場は、１９３６年（昭和１１）に建設されたもの。

注４：「富士電機製造株式会社」は、１９２３年（大正１２）に「古河電気工業」と「シーメンス社（独国）」と合弁で設立。この会社の直系の会社が「富士電機株式会社」で、モーター製造などに強みを持ち、川崎市田辺新田に工場を持っています。

　また電話部が独立して「富士通信機製造株式会社（現「富士通」）」になります。なお、川崎市中原工場は、１９２４年（大正１３）に建設されたもので、「富士通」の登記上の本店となっています。

注５：「キヤノン」は、１９３３年創業の「精機光学研究所」がルーツ。国産の高級カメラ製造から始まった会社です。本社は、大田区下丸子（ガス橋のところ）にあります。

写真は、①１８８１年（明治１４）に登場した国産代１号電話機（現沖電気製作、HP「門司電話通信レトロ館」掲載写真から一部切り取り）、②１８９０年（明治２３）に製造が開始された国産白熱電球と同タイプの電球（現東芝製作、HP「東芝未来館」掲載写真より）、③１９０３年（明治３７）に国産化された卓上電話機（現ＮＥＣ、HP の「Muuseo」掲載写真より）、④代表的な電気通信関係工場・事業所の位置（Yahoo 地図に細見加筆）

①

②

③

④

富士通　中原工場
登記上の本店
ＮＥＣ　玉川工場
キヤノン　本社
東芝　小向工場
東京電気（東芝）川崎工場
現在は再開発され、ラゾーナ川崎に
富士電機　川崎工場